

第 34 回 安田女子大学・安田女子短期大学 エッセイコンクール

課題部門 テーマ：子どもたちの未来を考える

学長賞「子どもたちの逃げ場所」

文学部日本文学科 1 年 1 組 三浦 朱理

学校へ行って長い時間、座席に坐り勉学に励む。学期末になると、試験日が迫り悪い点数を取らないよう、一夜漬けで暗記をする。全員で同じ問題に取り組み、数日後に採点されて返ってくる頃には勉強した内容は半分程度しか覚えていない。

私はこのような高校生活を送っていた一人だった。高校生まで勉強が得意ではなかったが、自分の思いを自由に書いてもよい作文や、答えのない芸術科目は好きだったように思う。逆に私の周りの友人は、作文の課題が出るとやけに嫌がっていたものだった。自分の好きなことを書くのはなんだか恥ずかしいし、何より文章にするのが手間だと言っていた。そのような話を聞いていると私もなかなか「文章を書くのが好き」とは言い出せず、隠すつもりはなかったけれど言葉を呑み込んでいた気がする。

このように勉強面だけに限らず日常生活において、好きなものを好きと言い出しにくい世の中に生きづらさを感じることがある。皆さんも世の中に生きづらさを感じたことはないだろうか。

そして、生きづらさを感じた時、どこへ助けを求めているだろうか。私の場合は SNS の世界だった。一番簡単に見つけられる場所で、自分の所属を隠せるため周りの目を気にすることなくそこではのびのびと自分らしくいることができた。現実世界では私と同じ境遇の人を見つけるのが難しかったのだが、不思議と SNS 上では同じ境遇の人をたくさん見つけることができたのだ。生きづらさを抱えていた人が多くいることを知っただけで私はとても救われた気持ちになった。また、私と考え方の違う人を知ることができた。自分になり視点を持っている人にはとても新鮮で惹かれるものが多くあった。

しかし、よく世間で言われているように SNS には危険も同じようにある。私は初め SNS に限らず現実世界でも危険は同じようにあると思っていた。SNS 上で興味を惹かれる人に、距離感をほんの少しだけ間違えて、ハマっていく。気がつけば自分がボロボロになる。自分ではその事態に気付かず、第三者から声を掛けられハッと現実世界に引き戻されるなんて話は、割とそこらへんに転がっているものだったのだ。SNS の本当の怖さとは、周りから見えないという点だ。目の前に怪しげな路地があったとしよう。子どもは興味本

位で入ろうとするかもしれない。だが、路地に入りそうになる子どもを見て引き留める親や、近所のおじいさん、おばあさんの存在が今まではあっただろう。

小学生のころからスマホを持たせている親は少なくない時代になっている。SNS は私たちの生活に必要不可欠になっている。先ほど話したように SNS に救われてきた人も多くいるだろう。だからこそ、そこまで普及を遂げたものと、これからは共存していかなければならない。これからの未来、私たちはどのようにして子どもたちを守ることができるだろうかと、私は考えた。

子どもたちが生きづらいと感じるのには理由があると思う。まず始めに、子供の能力を「点数化」しているからだだろう。性格も得意不得意も違う子どもたちを全員同じ物差しで測り、等しく点数をつけていく。もちろん数値化することで学力を見るのに等しく正確な情報は出る。一方で、学校へ通うことが一般化した結果、人は「子ども」と呼ばれる二十歳までの間のほとんどの期間を、数字で評価される世界で過ごすことになる。子どもたちが通う学校は人と違うことが理解されにくい世界でもある。確かに協調性や多文化理解などが授業にも取り込まれてはいる。一見、個性を認め合うことが重要視されているようでもあるが、私たちの頭の片隅にあるのは「人と違うことは悪いことではない」ということだけであって、「いいことでもない」ということではないだろうか。勉強は苦手で手を付けないが、絵を描くのは大好きでずっと絵を描く子どもがいても、なかなか第一声に好きな絵をもっと伸ばそうよ！と声をかけてあげられる大人は少ないのではないだろうか。子どもたちの将来を気にかけるあまりに、苦手な勉強を頑張ろう！と声をかけてしまう人の方が多いのだと思う。このような小さな積み重ねが子どもたちに生きづらさを与えているのだらうと考えている。

そして、私たちが子どもたちの未来のために正解のない社会へと変えていかなければならないのだ。SNS 社会では「点数化しない社会」「人との違いを誇れる社会」が実現している。それを今生きている社会にも作ってあげることが大切なのではないだろうか。SNS と共存していく子どもたちに、「逃げ場所」としてのみ SNS と向き合う子どもたちを減らしたい。その「逃げ場所」は現実世界に存在してほしい。学校が逃げ出す原因になる世の中ならばそこから変えていかなければならない。

<講評>

路地に迷い込むのに誰も気付かず、止めてやれない・・・SNS と現代の子どもとの関係がよく書けている。定量評価の対象物という身の上から抜け出す先は、サイバー空間しかない子どもたち。鋭い切り口を示した作品である。特に、若者が「生きづらさを感じる時、我々はどこに助けを求めるのか」という筆者の問いが作品にインパクトを与えている。筆者は SNS の世界が持つ都合の良さを知りつつ、そこに蠢く危険も認識している。そのような危

険をはらむ SNS の世界に逃げ込まざるを得ない現代の子どもの状況を作っているのは、学校教育の問題であり、さらには現代社会の価値観の矛盾にあるとの指摘には納得させられる。加えて、SNS の危うい世界での居心地のよさとそこに潜む危険性を見事にあぶりだしている。理屈抜きの「同調圧力」に対しては、表層的な「異文化理解」などの小手先学習では無理でしょうと厳しい評価を下している点が優れている。総じて、人を数値化して評価することに違和感を感じ、傷ついた子どもが SNS に自分の居場所を見つけそこに逃げ込んでいる現状と、その危うさを的確に捉え、自分なりの解決策を模索している。「逃げ場所は現実世界にそれも学校に」という締めくくりは非常に説得力のある訴えかけと評価できる。

エッセイコンクール審査員／富岡 治明・永田 彰子・吉目木 晴彦・大庭 由子・高田 厚